

私の一文字「命」

副代表幹事・専務理事
横尾 敬介



それぞれ違う“命”を大切に生きる

会員の方が思いを込めて選んだ一字に、書家の岡西佑奈さんが命を吹き込む「私の一文字」。第11回にご登場いただいたのは、横尾敬介副代表幹事・専務理事です。

岡西 横尾さんがお選びになった「命」という文字は、「令」に口を付けたものです。ひとやね（へ）は深い帽子を被っている様子で、その下の部分は人がひざまずいて神様のお告げを聞くときの姿を表しています。口は顔の口ではなく、「サイ」という「神仏に捧げる祝詞を入れる器」、つまり神様からの授かり物を表しています。

横尾 初めて聞きました。私がこの文字を選んだ理由は、私の生い立ちにかかわります。私は三男として生まれましたが、長男は生まれながらに障がいを持ち、二男は1歳半くらいで亡くなっています。二男が生きていれば私は生まれていないと母から言われたことも、「命」を考えるきっかけとなりました。

「生まれ出てくる」のは自分の意思ではありません。「命」は神様から授かったものです。兄は71歳で今も元気ですから、障がいを持っているからといって不幸ということはないと思います。さまざまな人がいますが、これは不平等というわけではなく、人は生まれながらに違うということ。一人ひとり違った「命」だから大切にしないといけない、とあるときから思うようになりました。

岡西 いつごろから、そう思われるようになったのですか。

横尾 学校で「命」という漢字を学んだときからです。「命」とは生物が生きていくための原動力です。「命」が人間にとって出発点だと自然に思ったものですから、ずっと「命」にこだわってきました。

岡西 そのこだわりについて、もう少し詳しく教えてくださいいただけますか。

横尾 昭和25年に生まれた次兄と私は、自家中毒

という同じ病気にかかりましたが、兄には間に合わなかったペニシリンが昭和27年に米国から輸入されたことで、私は救われました。両親から「この薬がなかったらお前は生きていなかった」と聞かされたことにも、運命的なものを感じました。

岡西 仕事をする上で「命」を意識されることはありましたか。

横尾 私は会社では、部下に対して「人を好きになれ、好きにならないとその人のことを良くは見られない」と言ってきました。管理職は人を本当に好きにならないと、本当の意味での評価ができません。私自身、会議で意見がぶつかり、相手と怒鳴り合っても、終わったらニコッと笑って握手します。「仕事が憎いだけで、あなたが憎いわけではない。あなたの人間性を否定しているわけではない」と言っていました。人それぞれ違うし、上司だろうが部下だろうが「命」の価値は変わりません。上司とけんかをして人事考課が最低だったこともありましたが、私には「命」という一つの柱があったから、折れなかった。人はそれぞれが神様から預かった「命」を大事にして生きている。人と違って当たり前、個々を尊重することが私の信条なんです。

岡西 経済同友会に関する事で、「命」につながることは何かありますか。

横尾 専務理事という役職に就いたのは、ある種の偶然でもあります。そういう機会が与えられたのはラッキーなことです。「命」があったからこそ、そうした幸運にも出会えたのだと思います。



書家

岡西 佑奈

1985年3月生まれ。23歳で書家として活動を始め、国内外受賞歴多数。